うぐいす

原民喜

梅の花が咲きはじめました。学校の門のところにある梅も、公園の池のほとりにある梅も、静かに花をひらきました。雄二の家の庭の白梅も咲きました。花に陽があたると、白い花はパッとうれしそうにかがやきます。日蔭の枝にある花は静かに青空をながめていま す。梅の花はみんなじっと何かを待っているようでした。

雄二の家の庭さきに、ある朝、うぐいすがやって来ました。ホーホケキョ　ホーホケキョ　うぐいすは梅の枝にとまって二声三声さえずりました。が、すぐにへいをとびこえて、どこかへとんで行ってしまいまし

た。

　その翌朝もまたうぐいすがやって来ました。こんどは、雄二の家の庭が気に入ったのか、少しゆっくりしているようでした。うぐいすは梅の木の枝から枝へ上手にとびうつって遊んでいました。が、しばらくすると、またへいをとびこして行ってしまいました。

　うぐいすは毎朝やって来て、だんだん雄二の家の庭を好きになるようでした。縁側の方から雄二たちが見ていても、あわてて逃げだすようなことはありません。

　日曜日の朝でした。

『よし、あのうぐいすを一つ写真にうつしてやろう』

と、雄二の父は早速カメラを持って縁側に現れました。

『とれた、とれた、うまくとれたぞ』

父はうれしそうでした。雄二もどんな写真が出来るのか早く見たくてたまりませんでした。五日ほどして、うぐいすの写真は出来上りました。それは庭の黒べいと梅の枝が黒くうつっていて、白い花とうぐいすの姿がくっきりと浮出ている、すばらしい写真でした。雄二は父からその写真を一枚もらいました。

けれども、その写真が出来た頃から、うぐいすは雄二の家の庭に姿を見せなくなりました。どうしたのかしら、どうしたのかしら、と、雄二はしきりにさびし

くなりました。
雄二はうぐいすの写真をポケットに入れて学校へ行きました。
『僕のうちに来ていたうぐいすだよ』
『そうかい』と、山田君は目をみはりました。
雄二は山田君をつれて、家にもどって来ました。が、庭に来てみても、やはりうぐいすはいませんでした。
雄二と山田君はその写真と庭の梅の木を見くらべて調べてみました。ちょうど、あのうぐいすがとまっていた枝が見つかりました。
『あそこのところにとまっていたのだね』

『うん、あそこのところだ』

『あそこのところに何かしるしつけておこう』

山田君はポケットから白いひもを取出しました。そして、それをうぐいすのとまっていた枝のところに結びつけました。

底本：「原民喜戦後全小説下」講談社文芸文庫、講談社
１９９５（平成７）年８月10日第１刷発行
底本の親本：「定本原民喜全集２」青土社
１９７８（昭和53）年９月20日初版発行
初出：「愛媛新聞」
１９５１（昭和26）年２月号
入力：Juki
校正：土屋隆
２００７年11月15日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。